

東京大都市圏における若者の日帰り観光・レジャーの時間的・空間的特性

—大規模人流データによる分析—

杉本興運

首都大学東京都市環境学部

本研究では、東京大都市圏における若者の日帰り観光・レジャーの時間的・空間的特性を、大規模人流データの分析結果から検討した。外出時間に着目した時間的特性の分析では、年齢が高くなるにつれて観光・レジャーの活動時間が昼間だけでなく夜間にも拡大すること、成人では学業、労働、家事を主体とした職業・学生種別がそれぞれもつ生活上の制約によっても観光・レジャーの活動時間に差異が生じること、性別比較では男性より女性の方が夜間での観光・レジャーをする人の割合が大きいことなどが明らかとなった。訪問先に着目した空間的特性の分析では、若者全体で浦安市が最も人気の訪問先ゾーンであること、それ以外のゾーンを類型化すると特定タイプの若者の訪問が目立つゾーンや様々な属性の若者が多く訪れるゾーンが抽出され、特に後者は若者の観光・レジャーにとって重要な地域であること、昼夜別かつ男女別で訪問先選択の傾向が異なることなどが明らかとなった。

キーワード：若者、日帰り観光・レジャー、行動空間、東京大都市圏、パーソントリップ調査

I はじめに

1. 研究の背景

1) 若者の観光・レジャー

若者に焦点を当てた観光・レジャーの研究は、「若者の旅行離れ」と呼ばれる現象を共通の課題認識とし、その解決に資する知見提供を目的として活発化している。その背後には、若者の旅行を活性化することが、将来の観光・レジャー産業の維持や発展を促すという期待がある。特に若者の国内宿泊旅行と海外旅行において、旅行離れの傾向が顕著である。例えば、観光庁（2011, 2014）では若者旅行振興政策の一環として、若者の国内旅行および海外旅行の実態や今後の旅行意向に関する調査を実施し、子どもの頃の旅行経験がその後の旅行実施頻度に影響を与えるという結果を示している。中村ほか（2014）の一連の研究では、若者の海外旅行の阻害要因を心理学の観点から分析し、「滞在不安」「計画負担」「同行者・自分（に関する事柄）」「言語不安」「時間不足」「金

銭不足」の六つがあることを明らかにしている。また、海外旅行に行くか・行かないかの意思決定プロセスでは、これら阻害要因に加え、動機づけ、すり合わせ努力、自己効力感が互いに影響を及ぼしながら進むことを示した。奥山ほか（2010）や日比野・佐藤（2012）は、若者の国内宿泊旅行や生活実態に関する数種類の統計資料を使用し、その経年変化をみることで、若者の旅行離れの要因を分析している。その中で、時間的・金銭的な余裕のなさは旅行をしない大きな理由ではあるが、若者の旅行離れという現象の直接的な要因ではなく、むしろ若者の余暇時間の使い方に関する生活様式や価値観の変化とそれによる参加者数の減少が旅行離れに影響している可能性が高いことを示した。山口（2010）は、日本における若者の海外旅行の変化を観光に関わるメディアとそれらが生まれた社会背景から整理し、海外旅行離れの要因は、リゾート地やアジアの都市を目的地としたスケルトンツアーの隆盛によって、どこでもショッピングやグルメを中心とした画一的な体験しかで